

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	石 川 峻
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
小学生のバスケットボール指導における3人制活用に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	上 田	毅
審査委員	教 授	沖 原	謙
審査委員	教 授	山 崎	博 史
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究の目的は、3人制を従来の5人制と比較し、3人制の特徴を明らかにした上で、今後の小学生の指導における3人制の活用の意義と留意点を明らかにすることであった。</p> <p>本論文は5章から構成される。第1章では、3人制バスケットボールについて、先行研究を検討し問題の所在を明らかにした。そのうえで研究課題を導き出した。</p> <p>第2章では、生体負担、技能・戦術、ゲーム後の主観的評価の指標から、3人制と5人制を比較し、3人制のバスケットボールのゲームの特徴を明らかにした。その結果、小学生において3人制は5人制と比較し、小さなコートでも十分な生体負担が確保することができ、触球数やショット試投数等の個人がボール操作を行える機会も増えた。また、同じ時間内において、攻撃回数が多く、攻撃完了率が高いことから、多くのショットを試投することができ、選手の主観的評価も高かった。</p> <p>3人制は1人あたりの触球数やショット試投数が多くなるが、McCormick et al. (2012) は高校生においては、ポジションにより触球数に差があることを報告している。そこで、第3章では、小学生でもポジションによる差があるかを明らかにするために、3人制と5人制のポジションごとの触球数の違いを検討した。その結果、以下の知見が得られた。ガード（以下、G）、フォワード（以下、F）においては3人制が5人制より触球数が有意に多かった。それぞれのゲームごとのポジション別触球数については、3人制ではGとセンター（以下、C）、FとCで有意な差がみられた。5人制ではGとCで有意な差がみられた。</p> <p>第2章と第3章では、3人制のバスケットボールの特徴を明らかにしたが、バスケットボールで最も正確に身につけなければならないのがショットの技能である。Erčulj et al. (2020) は、3人制と5人制のショットの種類とそれぞれのショットの確率を検討したが、その質については明らかでない。そこで第4章では、3人制と5人制のショット場面を比較し、ショット前の動き、ショットの方法、位置に関する3人制の特徴を明らかにした。</p> <p>その結果、3人制のショット場面の特徴は、ショット前の動きでは、「アウトサイド」、</p>			

「ボールクリア・チェックボール・ボール運び」, 「ドリブルドリフト」の割合が高かった。また, ショットの方法では, 「1対1」や「アウトサイドキャッチショット」の割合が高かった。そして, ショットの位置ではペイントエリア外の「①(左サイドのトップからファウルラインにかけてのエリア)」, 「②(右サイドのトップからファウルラインにかけてのエリア)」, 「③(左サイドのファウルラインからコーナーにかけてのエリア)」, 「④(右サイドのファウルラインからコーナーにかけてのエリア)」の位置からショットする割合が高かった。

第5章では, 総合考察として, 小学生における3人制の活用の意義と練習方法の留意点について検討した。その結果, 3人制は, 1) 5人制と同程度の生体負担, 2) 少ない人数, ハーフコートでも満足度が高く, 十分に楽しめる, 3) 攻撃回数やショット試投数, 1人あたりの触球数が増加する, 4) 1対1の攻防が増加する, 5) アウトサイドショットのチャンスが増加する, といった活用の意義があり, 育成ツールとして良いトレーニングになることが示唆された。

一方, 練習方法の留意点については, 1) ショットクロックの短さがゲームの生体負担に影響する, 2) 5人制とのスペースの使い方に違いがある, 3) コートを縦に走るファストブレイクというプレーが発生しない, 4) ボール保持者が偏る可能性がある, 5) ヘルプローテーション等の組織的な守備が難しい, といったことを留意した上で指導者は3人制を活用する必要があると考えられた。なかでもボール保持者の偏りに関しては, 「ドリブルの制限」や「ボール接触に関するパスの制限」といった, ボールクリアの際のルールの変更等により改善できる可能性が推察された。また, ショットクロックに関しても, 現行ルールの12秒から, 技能レベルにより, 増加, 減少させることで運動の強度が変更できると考えられた。さらに, スペースが広く, ヘルプローテーションが難しい中でも粘り強く組織的にディフェンスしようということを強調することで, 良いトレーニングになる可能性もあった。

このように, 本論文では, 次の2点について高く評価できる。

1. 3人制バスケットボールが, 5人制のバスケットボール指導の新しいツールとして可能かどうかの観点から複数の要因について定量化や定性化したこと。
2. 小学生のバスケットボール技能の改善を促すために3人制を導入する際, 配慮すべき点, ルールの工夫, および指導者の意識の在り方について, 明らかにしたこと。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和4年7月27日